

<関東ブロック交流ウォーク>

「戦争遺跡・日吉台地下壕見学」

日 時:2019年22日(土) 天候:雨のち曇り 6000歩 約4km

集 合:東横線日吉駅改札口 銀のボール前 12時45分

コース:日吉駅→慶応大学日吉キャンパス・連合軍地下壕跡内→日吉駅

参加者:吉越(L) 仲 高橋文 小野里 菊池 熊島 渡辺 小島 金子 桑名 奥村 吉岡 吉田 大川 古尾谷 計15名

昭和16年12月8日、ハワイ真珠湾奇襲攻撃で開戦の火蓋を切った太平洋戦争。この日を境に、国民は3年8ヶ月にも及ぶ苦しい生活を余儀なくされることになりました。開戦当初こそ有利に運んだ戦いも、やがては米国の豊富な資源と技術力により、多くの艦船と航空機を失ったことで、最後は特攻の創始者とも言われた海軍中将大西瀧治郎をして、「特攻なんていうものは外道の作戦」と言わしめた神風特攻隊に続き、前途ある多くの若者たちが南の空に散っていった。終戦の前年には旗艦をも失った連合艦隊司令部はついに海から陸に上がり、標高40mで通信状態の良い日吉台の慶応大学校舎・寄宿舍等に司令部を移し、本土空襲に備えその下に地下壕を建設した。見学のこの日は、大学校舎内で全体説明を聞いている間に、外は豪雨となり一時足止めを食いましたが、小雨になった頃を見計らって壕内へと向かいます。当然ながら壕内は電灯もなく全くの暗闇。保存会スタッフのライトと参加者のライトが交錯して、まさに地底探検の様な趣。岩盤をくり抜いた壕内には側溝もあり、湿気のせいか足元が濡れていてライトがないと危険です。内部は幾つもの部屋に分かれており、天井には電灯の取り付け跡も残り、外界と閉ざされたこの場所で、終日暗号電文を解読していた電信・暗号員たちの苦労が偲ばれました。

戦争を知る世代が少なくなっていく今、この様な戦争遺産を後世の人々に伝え残していくことは、我々の義務ではないかと、暗い地下壕の中で考えさせられた見学会でした。 <フォトレポート 小島>



★帰り際に東横線日吉駅をバックに慶応大学内で集合写真。でも二人ほど見当たらず？（左端はTWC青嶋会長）



東横線日吉駅改札前。大勢の人々で混雑していました。

※この見学会は、「日吉地下壕保存の会」により月2回開催されており、我々以外にも一般参加者が多かった。



集合目印の通称「ぎんたま」。(銀で良かった！)



黄色のベストを着た保存の会の方々。ボランティアです。



駅の正面が慶応大学日吉キャンパス。



駅を出て来往舎内へ。ここでスタッフの紹介と本日の地下壕見学会の概要説明がありました。



壕内での注意事項等の説明があり。



図や写真を使っでの詳しい解説も。



屋内で説明を受けていたところ、外は物凄い豪雨となり暫く足止め。その後小雨となり壕へと向かった。



グラウンド横の急階段を下ります。雨で足元注意。



ここが地下壕の入り口ですが狭いので一人ずつ。



壕内の壁は湿気で濡れています。所々には側溝も。また換気用の通風孔もあってまさに地下要塞です。



ここは司令長官室。貴重なコンクリートの壁です。また主要壕には当時珍しい蛍光灯も使われていました。

※1944年に掘られた地下壕の総延長は約5キロ。キャンパス内にある入り口から急坂を下りると真っ暗な長い通路が続く。天井の高さが3メートルある広い作戦室や約30台の短波受信機で無線を受けた電信室、暗号室などが内部に設けられていた。悪化する戦況報告が各地から集まり、沖縄特攻作戦へ向かう途中の45年4月、鹿児島県沖で撃沈された戦艦大和への出撃命令はここから出された。ただ直接送信すると位置が特定されるため、ここから千葉の送信所を経由して送られた。



ここには地上の司令部へ通じる階段があった。



壕の天井に残る電灯の取り付け金具と木製の台座。



この先は私有地となっていて倉庫として使われている。



電信・暗号室。ここから大和への出動指令が出た。



壕の出口は霧につつまれていた。



レンズが曇ってしまうほど。



外の空気を吸いほっと一息。



構内にあるチャペル。海軍はここも使っていたようです。建学の精神が基督教によらない学校にチャペルがあるのは珍しいようですが、裏から見た建物はかなり老朽化が進んでいました。

※慶応大学の敷地内には、他にも地下壕が存在しますが、今回見学できたのは連合艦隊司令部があった壕だけ。またこの学内とは別に、東横線を挟む反対側の山裾には艦政本部地下壕もあったそうです。



グラウンド内にはキノコ型の地下壕換気口がある。
またここには縄文時代の遺跡跡もあるとのことでした。



地上司令部となっていた三棟の寄宿舍。南棟は現在も
学生寮として使われている。(カメラ禁止のためこれだけ)

■今回の見学会は目的が地下壕と言うことで、光がない暗闇空間のため写真が撮りにくく、シャッターが殆ど押せませんでした。従って掲載した写真は地下壕の一部ですが、どの壕も内部には何も無く殆ど構造が同じなので、これらの画面から想像して頂ければと思います。(なお、各説明文の一部は保存の会資料等より引用しました)

<今日の一言>

一般人を含めて300万人以上が犠牲となった太平洋戦争ですが、奇しくも23日は「沖縄慰霊の日」。敗色が濃厚となったにも関わらず、時間稼ぎのために沖縄を犠牲にしてまで、軍上層部たちは安全な地下壕を建設し退避・・・歴史に「もしも」があるとすると、せめて一年前に終戦を迎えていれば、沖縄の軍民合わせて20万人の命が失われることは無かったとも云われています。長野県松代町にある大本営跡の「松代象山地下壕」も見学したことがありますが、戦争が起こると当事者たちは後方にいて、犠牲となるのは前線の将兵や一般国民です。近頃の日本は、マスコミも含めて戦前のような流れに向かっているとの指摘もある中、うっかりボケは笑いで済むものの、決して「平和ボケ」にだけはならないようにしたいものです。

END